

ケレト返々モ惜マレケル、

〔平家物語<sup>八</sup>〕ほうちうじ合戦の事

源の藏人仲兼は其勢五十き計で、法住寺殿の西の門をかためてふせぐ、略中大勢の中へかけ入さんぐに戦ば、主従八きに打なさる八きが中に河内の日下たうにか、ばうと云法師むしや有月げなる馬の口のこはきにぞ乗たりける、此馬はあまりに口がつよふて乗たまつべし共存候はずと云ければ、源藏人さらば此馬に乗かへよとて、くりげなる馬の下小白に乗かへて根のろの小彌太が二百よき計で引へたる、かはらざかの勢の中へかけ入さんぐに戦、そこにて八きが五き討れぬ、か、ばうは我馬のひあひ也とて、主の馬に乗かへたりけれ共うんやつきけん、そこにて終に討れにけり、こ、に源の藏人の家の子に、次郎藏人仲頼と云もの有、くりげなる馬の下小白がかけ出たるを見付て、下人をよび、こ、なる馬は源の藏人の馬と見るはひが事か、さん候と申、さてどのちんへやかけ入たると見つる、かはら坂の勢の中へこそ、入せ給ひつるなれ、御馬もやがてあの勢の中より出来て候と申ければ、次郎藏人涙をはらくとながひて、あなむさんはや討れ給ひたり、ようせう竹馬の昔より、まなば一所でまなんと社契りしに、今は所々でふさん事社かなしけれとて、さいしのもとへ、さいこの有さま云つかはし、只一きかはら坂の勢の中へかけ入、略中たてさまよこさまくもで十文字にかけわり、かけまはり、戦ひけるが、敵あまた討取て、終に打死してけり、源藏人は是をばまはり給はず、あにの河内守仲のぶ打ぐして、主従三き南をさして落行けるが、略下

〔平家物語<sup>十</sup>〕三日平氏の事

五月四日の日、池の大納言より盛の卿、くはん東へ下向、略中爰に彌平兵衛宗きよといふ侍有、さうでん、せん一の者なりしが、あいぐしてもくだらず、いかにやと宣へば、君こそかくてわたらせ